

〈幼児教育〉

夢中になって遊ぶ環境構成と援助の工夫 —子どものつぶやきとドキュメンテーションの活用を通して—

宜野湾市立志真志幼稚園 教諭 伊佐つかさ

I テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境は急速に変化している。生活の多様化、都市化、情報化、少子化の進展に伴い、子どもたちが安心して遊べる場や子ども同士が関わって遊ぶ機会が減少している。また、テレビゲームやインターネット等の室内の遊びが増えたことで、外遊びの機会が減少しており、子どもが成長し、自立する上で必要な、直接的・具体的な体験や、人と関わり様々な感情体験をする機会が減少している。

幼稚園教育要領解説（2018）第1章総則の第1、幼稚園教育の基本には、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と示されている。また、教師の役割として「教材を工夫し、物的・空間的環境を構成する役割と、その環境の下で幼児と適切な関わりをする役割がある」と幼児期の教育を担う教師の役割の重要性が記されている。そのため、幼稚園では幼児の遊びや生活といった直接的・具体的な体験を通して、人と関わる力や思考力、失敗や葛藤を経験することからの自己調整する力などを育てていくことができるよう、教師は幼児理解に努め、子どもが主体的な活動を行えるよう計画的に環境を構成し、活動がより豊かになるよう工夫・改善をしていく必要がある。

これまでの私の保育実践では、虫捕りやごっこ遊び、空き箱などのさまざまな素材を組み合わせての制作など、幼児が自分の好きな遊びを見つけて楽しむ姿や、友達と関わり、工夫しながら遊ぶ姿を受け止め、環境の構成や援助を行ってきた。また、週案を活用し、保育を振り返り、幼児の姿から一人一人の幼児理解や遊びの読み取りに努めてきた。しかし振り返ってみると、友達同士誘い合って関わりを楽しんでいる子が多い反面、遊びが断片的で、なんとなく遊んでいるという姿や、先生と一緒に遊びたいと、教師がその場を離れると遊びから抜けてしまい、友達とうまく関われず教師を頼る姿も多い。幼児が主体的に活動できる環境の構成や、教師の援助が不十分であり、遊びそのものに魅力を十分に感じられていなかったと考える。

園生活の中で、幼児が「人、もの、こと」に触れ、あらゆる環境からの刺激を受け止めたり楽しんだりして、次第に友達と共に夢中になって遊びを繰り返していきことが求められる。そのため、今どのようなことに興味や関心を向けているのか、遊びの何に楽しさを感じているのかを共感的に受け止め「やってみよう」と感じられる環境を幼児の姿から構成していく。その手立てとして、幼児のつぶやきを丁寧に聴き、ドキュメンテーションを活用することで、心が動かされる場面を捉え、夢中になって遊びこむための環境構成

(人的、物的)の工夫について考えていきたい。また、「夢中になって遊ぶ」について考えていく中で、教師一人一人が個々で振り返りを行うだけに留めず、幼稚園全体で遊びを共有することで、より適切な援助を行えるのではないかと考える。そこで、職員間でも幼児の姿を共有し、一人では気づかなかったことや自分とは違う捉え方に触れ、一人一人への幼児理解・遊びの読み取りを深めることで、次の遊びの展開へとつなげていきたい。

以上のことから、本研究では幼児が「やってみたい」と遊びを楽しみ、友達と共に夢中になって遊びこむことができるような環境構成と援助の工夫を探っていききたいと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究の視点

本研究では、幼児が夢中になって遊ぶ姿を引き出すために、環境構成（制作コーナー）の工夫を図り、幼児のつぶやきを手がかりに援助の工夫を行うことで、遊びの広がりと深まりにどのような変化をもたらすのか、遊びの様子を考察し変容を捉える。

Ⅲ 研究内容

1. 幼稚園教育において育みたい資質・能力について

幼児期の子どもたちは、遊びや生活を通して、様々な対象と直接関わることで総合的に学んでいく。幼児は楽しいと感じる時にこそ多くを学ぶ。心が動き「やってみたい」「おもしろそう」という気持ちが芽生えると、自ら様々に試し、工夫し、考え、表現し、感じ、気づき、分かり、できるようになっていく。幼児にとって、遊びの中から生まれたきっかけを育てていくことによって「学び」が生まれていくのである。このようにして幼児期に育まれた資質・能力は小学校以降の学びの基盤となり、後伸びする力となって、「生きる力」を培うことにつながっていく（図1）^[1]。

幼児教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであることを踏まえ、遊びを通した総合的な指導を行い、幼児の資質・能力を育てることが求められている。教師は、幼児一人一人の遊びのプロセスを捉え、学びの芽生えを促すことを意識して援助を行う必要がある。幼児が自発的な遊びの中で十分に活動し、様々な「人、もの、こと」との関わりを通して、心身の調和のとれた全体的な発達に必要な体験が得られるよう保育実践を行っていく。



図1 一貫した学校教育として「生きる力」を育む

指導計画の基本的な考え方と年齢別の計画(2024)より引用

2. 幼児期の遊びについて

(1) 幼児期の遊びとは

幼稚園教育要領解説（2018）（以下、教育要領）に「遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、その関わり合いそのものを楽しむことにある。（中略）幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている」と幼児期の遊びの重要性が示されている^[2]。幼児は身近な環境との出会いから興味や関心を広げ、感じ、気づき、考え、試しながら新しい発見を繰り返していく。このプロセスが遊びになくてはならない要素であり、発見の過程で、幼児は達成感、充実感、満足感、挫折感、葛藤などを味わい、精神的にも成長していくのである（教育要領^[3]）。幼児は、自発的な活動である遊びを通して、主体性、自己肯定感、協調性、自制心、意欲、コミュニケーション力、粘り強さ、創造性などを育てていく。この「育ち」の多くは幼児が「遊び」を通して身につけていくものである。その育ちの過程には、嬉しいことだけではなく、時には葛藤や辛い場面も生まれる。しかしそれは、遊びの中だからこそ乗り越えることができるのであろう。幼児の育ちにとって、遊びは最も重要なものである。

(2) 幼児の遊びの確保

子どもたちの現状は、三間の喪失と言われ「遊ぶ仲間、時間、空間」が子どもたちの生活から失われていることが指摘されている。岩立（2014）は「現代は人のかかわりの喪失の時代だ」と述べており^[4]、三間の喪失は幼児が多様な人と関わる機会の減少に繋がり、主体的に遊びや生活を展開することが難しくなっていると考える。教育要領では「幼稚園では、幼児の自発的な活動としての遊びを十分に確保することが何よりも必要である」と示されており^[5]、幼稚園においては、家庭では体験できない社会・文化・自然などに触れ、教師に支えられながら、幼児期なりの世界の豊かさに出会えるよう、幼児期にふさわしい、遊びを中心とした生活を送ることが大切だと捉える。幼児の遊びを大切にし、幼児がやってみたいと思うように教師が援助すると共に、幼児が自ら始めた活動を、満足するまでやり通せるだけの活動の時間と空間を保障することが必要である。

(3) 夢中になって遊ぶとは

夢中になって遊ぶとは、幼児の中に興味・関心がわき、自ら環境に関わる中でじっくりと活動に取り組み、没頭して楽しむことと捉える。教師は、幼児が活動に没頭する中で思考を巡らせたり、心を動かしたりする場面を捉え、活動が充実しているよう、環境の構成を工夫する必要がある。幼児が夢中になって遊びに没頭するためには、活動を「広げる」「深める」という2つの視点を持つことが大切だと考える。「広げる」は一人一人の遊びを仲間との遊びにつなげたり、異なる環境や素材で試したりすること。「深める」は教師が活動の見通しをもって、子どもと共に考え、次の一步に展開させていくことである。教師が、子どもの発達段階や遊び・生活経験などを踏まえて遊びの展開を見通し、複数の援助を想定しておくことで、

活動の「広がり」や「深まり」が促され、活動が充実していくのである。教師は、幼児が環境にどのように関わっていくかを捉え、関わりの過程を支え、遊びに没頭して充実感や満足感を味わっていただけるように援助していくことが大切である。

3. 幼児教育における「環境」の捉え

福元（2013）は「子どもにとっての環境の意味を考えた場合、それは『かかわるもの』である。子どもは周囲の環境に興味・関心をもって、積極的に自分自身の身体を介してかかわる。そうしたかかわりが、子どもが物事を知ること、すなわち学びの基礎となっていく」と述べている^[6]。幼児は、興味・関心を持った環境に関わる中で、身近なあらゆる環境からの刺激を受けとめ「感じる」「気づく」「考える」などの体験を重ねていく。その体験が「おもしろい」「やってみたい」と、新たな興味・関心となり、試行錯誤したり創造したりして、環境との関わり方を深めていくのだと考える。園生活において、幼児が積極的に環境に対して関わるようになることが大切であり、教師は、幼児が主体性を十分に発揮して環境との関わりを深めることができるように環境を構成していく必要がある。本研究では、幼児が環境と関わる中で生じたおもしろさや楽しさを、他の幼児や教師と分かち合う姿から、幼児の気持ちを受け止め、そのおもしろさが、さらに広がっていくよう環境構成の工夫に努めていく。

(1) 環境の構成について

教育要領にて「環境を構成するということは、物的、人的、自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況をつくり出すことである」^[7]とあり、幼児が遊び込むためには、幼児が主体的に活動し、幼児の「やりたい」という思いが実現できる様々な環境が身近にあることが求められると考える。宮里（2023）は「心揺り動かされる環境があり、その環境に自ら関わり、様々なアプローチが認められ、ともに楽しむ友達や教師がいたとき、子どもの体験は豊かなものになっていきます」^[8]と「やりたい」気持ちが沸き起こる環境を表している（図2）。

教師は目の前の幼児の姿から、幼児に体験させたいことは何なのかを考え、意図やねらいを組みこみ、その体験が可能となるように環境を構成していくことが大切だと考える。宮里の記述を参考に、子どもたちの「やりたい」気持ちがわき起こるために必要な、素材、自然、道具、仲間について、4つの柱で整理した（表1）^[9]。

本研究では4つの柱の「素材」に焦点をあて、制作コーナーの環境を見直し、環境構成・保育実践を行うことで、幼児が環境に関わって遊ぶ姿から、幼児の心が動かされる場面を捉え、振り返り、次の保育へつなげる環境の再構成を図っていく。

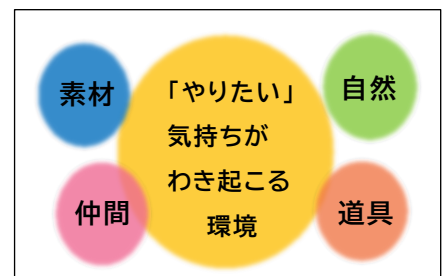


図2 「やりたい気持ち」がわき起こる環境
宮里（2023）を基に筆者作成

表1 「やりたい」気持ちがあき起こるために必要な4つの柱

宮里(2023)を基に筆者作成

素材	様々な素材に出会う経験を重ね、子どもが自分で選んで使いこなせるようになると、遊びの豊かさにつながる。 〔 絵本、ピアノ、ブロック、人形、楽器、折り紙、輪ゴム、ストロー、割りばし、空き箱、トレイ、モール、 段ボール、カップ、紙コップ、たこ糸、ビニールひも、リボン、新聞紙、チラシ、紙袋、綿 等 〕
自然	子どもたちと自然の出会いを丁寧に積み重ねていくことが大切である。 〔 太陽(日の光)、月、雲、雨、風などの自然現象、昆虫や動物、木や花 木の実、種、落ち葉、野菜などの栽培物 等 〕
道具	素材や環境に能動的に関わるツールとして力を発揮する。道具を使う体験から、幼児期に育てたい3つの資質・能力「知識・技能の基礎」が育つ。 〔 はさみ、くれよん、マジックペン、色鉛筆、セロハンテープ、 カッター、定規、鉛筆削り、ガムテープ、ボール 等 〕
仲間	一緒に楽しむ友人がいて、感動が広がり興味が持続する。仲間とは同年齢の子どもだけではなく、異年齢の子どもたち、出会う人から多くの刺激を受けている。

環境構成をする際、教師は幼児の活動の理解を深め、幼児が実現したいことを捉える必要がある。そのため、教師自らの振り返りや職員間の話し合いを行うことで、幼児理解を深めたり、教師間で共有したりして、環境を構成していくことが大切だと考える。柔軟にアイデアを取り入れたり、幼児の姿をイメージしたりしながら環境を変え、結果を省察し、教師同士の対話や連携により、環境を構成・再構成していく。

(2) 視察から学ぶ環境構成の工夫

環境構成の工夫について学ぶため、県内南部の幼児教育施設の視察を行ったところ、幼児の興味・関心に沿った環境構成が行われていたが、特に目を引いたのが、子どものつぶやきやアイデアが形になって残り、生き生きとした「対話する環境」である。そこにはドキュメンテーションの掲示がされており、子どもたちの探究の過程を示す写真やスケッチ、子どもの発言を書き起こした紙を貼るなどして記録・展示し、遊びのプロセス（子どもたちがどんな問いを持ち、何を試し、何を感じたのか）が見える化されていた（図3、4、5）。



図3 園庭で見つけた泡を観察している様子



図4 子どもたちの発言（泡への気づき、感じたこと）



図5 泡から生まれたものを観察している様子

ドキュメンテーションの掲示が「結果」ではなく「過程」を重視していることが伝わる環境となっていた。菊池（2025）は「ドキュメンテーションボード」（記録パネル）は、次の探究の足がかりを提供する『生きた教材』にもなりうるのです」と述べており^[10]、大豆生田（2025）は、「これらの写真を壁面にはることに、その時期の子どもの興味・関心に応じ、遊びをさらに広げたり深めたりするという意図があります」と述べている^[11]。こうしたコーナーは幼児自身が自分の学びを振り返る手がかりになり、また、教師や保護者も子どもの成長を共有できるものとして役立つと考える。ドキュメンテーションの活用が対話を生み出し、保育の質を高めていくことを踏まえ、本研究においては、幼児が興味・関心を持って遊びを進めたり深めたりしている姿を、幼児と共にドキュメンテーションとして作成していく。ドキュメンテーションを作成する過程で、自分たちの遊びを振り返り、新たな発見や気づきへとつなげていきたい。遊びそのものの魅力を感じたり、自分や友達の良さに気付いたりしながら、夢中になって遊ぶ幼児の姿を捉えていく。

4. 幼児理解について

(1) 幼児理解

幼児期にふさわしい教育を行う際に必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めることである。中坪（2019）は、保育実践の出発点は保育者の子ども理解であると幼児理解の重要性を示している。また、幼児理解の循環モデルとして①子どもの内面を理解する、幼児理解（Understand）、②幼児理解に沿って環境を構成・保育計画する（Design）、③実践する（Do）、④実践を省察する（Reflection）ことで幼児理解を再構成する「保育実践サイクル（UDDR）」を提案している^[12]。④の省察が新たな幼児理解を促し、その幼児理解に沿って次の保育計画に生かしていくことが保育者の力量を高め、保育の資質向上につながっていくと考える。教師は、目の前の幼児が今何に興味を持ち、何が育まれようとしているのかを捉えながら、幼児理解に努めていかなければならない。外から見えない内面を豊かにしていくことができるよう、教師は幼児の行動に温かい関心を寄せ、心の動きに応答する、共に考えるなどの基本的な姿勢で保育に臨み、幼児一人一人への理解に努めていくことが大切である。

(2) 幼児理解を深める年間指導計画

幼児の成長過程から援助の工夫や環境構成を考え、必要な体験を積み重ねていくことができるよう、それぞれの時期にどのような経験が必要か等を長期的に見通し、育ちの節目に即したふさわしい生活が展開されるよう年間指導計画を作成した(表2)。目の前の幼児の育ちや遊びの様子と照らし合わせるができるよう、【育ちの節目、幼児の遊び、教師の援助・環境構成】を、所属園の教育計画を参考に加筆・一部改訂した。幼児が今行っている活動の意味を理解し、発達を促す関わりや環境構成を考えながら、本研究と保育実践を進めていきたい。

表2 年間指導計画 (志真志幼稚園教育計画を参考に筆者作成)

期	I期 (4月～5月中旬)	II期 (5月下旬～7月)	III期 (9月～10月中旬)	IV期 (10月下旬～12月)	V期 (1月～3月)
育ちの節目	【新しい生活の始まり】 遊びや教師との関わりの中で安定していく時期	【友達と一緒に楽しい】 周囲の人やものへの興味関心が広がり、友達と関わりながら遊びを楽しむ時期	【それぞれの力を出し合う】 友達とのつながりができ、共にイメージを共有しながら遊びを楽しむ時期	【共通の目的に向かって】 友達とのつながりを深めながら、自己の力を発揮していく時期	【みんなの力を合わせて創り出す生活】 自信をもって行動し、自分たちで生活を進めていこうとする時期
幼児の姿	・入園、進級した喜びを感じ、新しい環境に自ら関わり積極的に遊ぶ子もいるが、緊張や不安からなかなか馴染めずにいる子がいる。 ・教師とのつながりをよりどころとしている。	・気の合う友達ができ、一緒に好きな遊びや興味を持った遊びを楽しんでいる。 ・身近な虫や草花に興味関心を示し、捕まえたり観察したり、育てたりしている。	・夏休みやこれまでの経験を取り入れながら遊びを楽しんでいる。 ・遊びが広がり様々なことに興味関心を抱く。 ・試したり、挑戦したり、互いに刺激し合いながら友達と一緒に遊びを楽しんでいる。	・運動会の経験を遊びに取り入れられたり、体を動かす遊びや運動遊びを積極的に楽しんでいる。 ・友達同士、互いの考えやイメージを出し合いながら相手を認めて遊びを進めている。 ・季節の変化に気づき、自然物を遊びに取り入れて楽しんでいる。	・文字や数字を取り入れた遊びに興味を持ち、友達同士遊びを進める。 ・互いの良さを認め合い、役割分担しながら意欲的に生活を進めていこうとする。 ・就学を意識し、仲間関係にまとまりが見られ、自信をもって行動している。
○ねらい・指導内容	○園生活に親しみを持ち、喜んで登園する。 ・教師や友達に親しみをもつ。 ・好きな遊びを見つけ楽しむ。	○好きな場所や遊びを見つけ、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わう。 ・遊びの場を共有したり、友達の様子を見たり真似て遊んだりする。 ・動植物の観察や世話をしながら、生長に関心をもち、かかわって遊ぶ。	○友達と力を出し合い、試したり工夫したりして遊ぶ。 ・感じたことや考えたことを表したり、伝え合いながら遊ぶ。 ・友達とルールを作ったり守ったりしながら遊ぶ。	○友達とイメージを伝え合い、共通の目的や目標をもって遊びを進める楽しさを味わう。 ・友達と相談したり工夫したりして遊ぶ。 ・イメージを膨らませ様々な表現を楽しむ。 ・身近な素材や自然物を遊びに取り入れて楽しむ。	○互いの良さを認め合い、友達とのつながりを深めながら、自分たちの力で園生活を進める。 ・友達と相談しながら、協力して園生活を進める。 ・伸び伸びと表現することを楽しんで、意欲や自信を高める。
幼児の遊び	パズル、粘土遊び、絵描き、ブロック、ままごと、固定道具、砂遊び、草花つみ、けんけんば、虫捕りなど	粘土遊び、制作遊び、折り紙(紙飛行機など) 色水遊び、石鹸遊び、シャボン玉、虫捕り、砂遊び、水遊びなど	ごっこ遊び(エイサー、キャンプ)、運動遊び(フープ、おおなわ)、リズム遊び、サッカー、制作遊び、虫捕りなど	運動会ごっこ、お店屋さん(ごっこあそび)、リズム遊び、鉄棒、運動遊び(ホッピング、竹馬、フラフープ、なわとび) 制作遊び(自然物を使って) ペーパーサートなど	劇遊び、お話・絵本作り、リズム、楽器遊び、たこあげ、けんだま、こままわし、文字・言葉遊び(かるた、すごろく、トランプ、郵便ごっこなど)
教師の援助・環境構成	・安心して園生活を送ることができるよう、一人一人の様子を見ながら共に遊んだり、寄り添ったりしながら信頼関係を築いていく。 ・これまで経験したことがある遊び、興味関心のある遊びができるような道具の準備をする。 ・友達と好きな遊びを楽しめるように、遊びのコーナーを設け、ゆったりと遊べる時間や場所を確保する。 ・温かく受け入れる中で、保護者との連携を取り幼児理解を図る。	・活動の様子を見て、必要な道具を準備したり、幼児の思いも聞き入れながら、道具の量や種類を調整する。 ・触れ合い遊びを通して、友達とかかわって遊ぶ楽しさが味わえるようにする。 ・身近な生き物や植物に興味や関心が持てるよう、教師も共に世話をして関わっていく。 ・砂や泥、水の感触を楽しんだり、開放感を味わい思い切り遊べるよう、教師も共に遊びを楽しむ。	・発見や驚き、感動を教師や友達と共感し合う中で、刺激を受け、友達と一緒にアイデアや考えを出し合い遊びが進めていけるようにする。 ・幼児が互いに認め合ったり、励まし合ったりしている姿を認め、友達とのつながりを深めていけるようにする。 ・力を発揮していることや、面白い発想で表現しているところを見逃さず認め、周りにも知らせていく。	・友達とイメージを共有して遊びを広げ、楽しめるよう、材料・道具を提案し、一緒に準備をしていく中で主体的に活動が進められるようにする。 ・自分なりの目標を持って頑張る姿を認め、励まし、活動への意欲や自信を高めていく。 ・身近な自然物と触れ合い、遊びの中に取り入れて楽しむことができるよう、幼児の遊びの様子やタイミングを見ながら、教師もアイデアを出したり一緒に考えたりする。	・自分たちで生活を進めていこうとする姿や、目的に向かって取り組む姿を認めながら、必要に応じて援助する。 ・友達やクラスのつながりを十分に感じられるように援助し、教師も一緒に楽しみながら取り組む。 ・これまでの生活を振り返って成長を確かめ合い、自信や意欲、就学への喜びや期待へと繋げていく。

5. 教師の役割と援助について

(1) 教師の役割

幼児は遊びを通して様々なことに興味・関心を持ち、心と体を動かして夢中になって遊ぶことで成長していく。そのため、幼児の自発的な活動である遊びが確保されるよう、教師には、幼児一人一人の行動と内面の理解に基づき計画的に環境を構成していく役割と、活動の場面に応じて援助していく役割がある。幼児の主体的な活動を促すためには、教師自らも幼児にとっての重要な環境の一つであることを忘れてはならない。教師の言葉や表情、仕草など、教師の醸し出す雰囲気は幼児の意欲を引き出して、遊びを発展させる重要な環境になる。幼児の発達に必要な体験が得られるよう、教師に求められる5つの役割を整理した(表3)。(教育要領^[13])

表3 教師に求められる5つの役割

幼稚園教育要領解説を基に筆者作成

(1) <u>幼児が行っている活動のよき理解者</u> 幼児の行動を温かい関心を持って見守る。幼児の活動の意味、時間の流れや空間の広がりをとらえ、幼児の心の動きや行動など遊びの展開を理解する。
(2) <u>幼児との共同作業者、幼児と共鳴する者</u> 驚きや感動など幼児に共鳴したり、幼児に合わせて同じように動いてみたり、同じ目線に立ってものを見つめたり、教師自身も活動に参加する。
(3) <u>憧れを形成するモデル</u> 教師自らも重要な人的環境である。身近な存在としての手本となり、教師の言動が心や態度を育てるモデルとなる。
(4) <u>遊びの援助者</u> 遊びや課題解決の援助者として、一人ひとりの発達に応じた援助のタイミングや、援助の仕方考えた関わりによって適切な援助を行うことが、幼児の遊びを深め、主体的にかかわる力を育てる。
(5) <u>心の拠り所(精神的安定)</u> 幼児が主体的な活動に取り組めるには、幼児が幼稚園で安定することが前提である。教師が受け止め、受け入れることが重要で、幼児と信頼の絆をつくり、親にとっても心の拠り所となる必要がある。

幼児は自分の思いを全身で表現して活動する。教師は「答」を示すのではなく、幼児が何に心を動かしているのかを感じ取り、温かな関心を寄せ、幼児と共に考え、幼児同士の繋がりを育てるという姿勢で保育に臨んでいくことが大切である。また、幼児の主体的な活動は友達との関わりを通してより充実し、豊かなものとなっていくことを踏まえ、幼児同士が関わり、繋がり合うことのできる環境を構成し、多様な体験ができるよう一人一人の心の動きに応じた援助をしていくことが大切である。

(2) 教師の援助

教師は幼児一人一人との信頼関係を大切に、幼児が自ら環境に関わる姿を見守ったり支えたり、共に活動しながら幼児理解に努め、幼児と共に園生活をつくり上げていく。教師の援助として、幼児の声に耳を傾け、その声を活動や環

境構成に取り入れ、幼児の遊びが充実していくように援助していくことが大切だと考える。そこで、援助の手立てとして、幼児のつぶやきを丁寧に聴き、小さなつぶやきも一人の意見として受け止めていく。また、ドキュメンテーションを活用することで、保育中は気づかなかったことや見落としていたことを振り返り、遊びの過程を捉え、幼児一人一人に合わせた援助へと繋げていく。

① 幼児のつぶやき（声）を聴く

「つぶやき」とは、何気ない言葉の中にある思いや願いであると考えられる。つぶやきは周囲に伝えようという意思を持ったものもあるが、考えていることや感じたことを、ひとりごととして知ることもあり、幼児の物事の捉え方に気づいたり、幼児のありのままを受けとめたり、寄り添うことに繋がる。幼児のつぶやきを丁寧に聴き、幼児の思っていること、考えていることを受けとめて保育実践し、その振り返りから保育を見直し、保育環境を改善するヒントにしていく。

② ドキュメンテーションの活用

浅井（2021）は、ドキュメンテーションとはエピソードを交えた写真や動画などを用いて、保育中の子どもたちの活動や保育の過程を可視化（見える化した）し、保育のプロセスが見えるように作成した保育記録の1つであると述べている。ドキュメンテーションを活用することで保育の過程が見えるようになり、次はこう変えてみようという改善策に繋がる。ドキュメンテーションを用いた保育とは、結果だけでなく、保育の過程を重視する保育であり、それゆえに保育の質向上に繋がると示している^[14]。

幼児期の教育は、幼児教育に携わっていない者には「ただ遊んでいるだけ」と思われてしまうこともある。幼児の成長や学び、園での姿を伝え、保護者の理解を求め協力を得ることは、幼児の成長と共に、保育の質を向上させるためにも重要なことだと考える。子どもたちが遊びや生活の中で学んでいること、教師の意図や思いをドキュメンテーション（記録パネル）として掲示・活用することで、保護者にとっての幼児理解につなげていきたい。

③ 遊びの振り返り、保育記録

幼児の遊びを大切にしたい保育を展開していくためには、一人一人の幼児理解や教師の適切な援助が求められる。そのため、本研究において振り返りや記録（エピソード記述）から幼児の姿を捉え、幼児が夢中になって遊ぶ姿を引き出せるように援助していく。

6. 本研究の枠組み

本研究では、制作コーナーにおける素材環境の構成と、幼児のつぶやきを手がかりとした援助の工夫、ならびにドキュメンテーションによる過程の可視化・共有を手立てとして位置づける。これらの手立てが、幼児の遊びの「広がり」と「深まり」（夢中になって遊ぶ姿）の変容にどのように関わるのかを検証する。遊びの変容をつぶやきの記録、ドキュメンテーション、エピソード記述、写真等を用いて整理する。

V 公開保育(実践の整理・共有)

本節は、検証保育当日の実践を整理・共有するための記述であり、検証の中心はⅦで扱う、検証保育前後の事例である。

— 公開保育指導案 —

令和7年12月9日

男児9名 女児12名 計21名

保育者 伊佐 つかさ

指導助言者 宮城 利佳子

1. 主な活動名 「好きな遊びを思いきり楽しもう」
2. ねらい 自分のやりたい遊びを楽しむ中で、友達と共通の目的や目標をもって関わりを深め、主体的に活動する楽しさを味わう。
3. 内容
 - ・興味のある遊びを十分に楽しむ。
 - ・友達と一緒に共通の目的や目標をもって遊び、イメージを共有して工夫したり、試したりする。

4. 活動設定の理由

幼児は、好きなことに没頭して遊ぶ中で「感じる」「気づく」「考える」などの多様な体験を重ね、自分の世界を広げていく。これまで、園生活の中で、幼児のやりたい遊びや、イメージしたこと「やってみたい」という思いを実現することができるよう、環境構成の工夫や援助を行ってきた。1学期後半より、空き箱や身近な素材を組み合わせての制作活動等を好んで楽しむ姿が見られるが、それぞれが思い思いにものづくりを楽しんでおり、そこからの友達との関わりや、次の遊びが生まれることが少ないように感じる。子どもたちが好きな制作遊びの環境構成の工夫や、教材研究を行うと共に、幼児の動線を考えた遊びやすい場を幼児と共に考えながら作っていくことで、より遊びを楽しみ、発展させることに繋がるのではないかと考える。教師の願いとして、好きな遊びにじっくり取り組む中で、試行錯誤を繰り返して、友達との関わりを通してさらに好奇心や探究心を育み、意欲的に遊んでほしいと感じた。そこで、遊びや活動の中で感じたことや考えたことを伝え合い、友達の考えに触れる機会をもつことで、さらに友達同士の関わりや遊びの繋がりができ、意欲的に遊ぶことへ繋がると考え、本活動を設定した。

(1) 幼児観

好きな遊びを通して友達関係も深まりつつある中で、幼児同士の互いの理解が見られるようになってきた。その中で、友達と意見が合わず、困ったことや嫌なことがあっても互いに考えを十分に伝えず、遊びが途切れてしまう。「もういいよ」と思いや考えを伝えることなく消極的な姿や、気持ちが晴れず、教師に助けを求めにくることも多い。「一緒にやりたいな」と、共に過ごしたいという気持ちや様子も見られるが、自信がなかったり、不安になって教師に何度も確認したりもどかしさも感じているのではないかと考える。好きな遊びを十分に楽しむ中で、互いに自分の思いや考えを伝え合い、友達に刺激を受けて工夫したり、作ったものを使って共に遊び、教え合ったり、相談したり、協力したりといった幼児同士の関わりを通して、様々な感情体験をすることが幼児の成長過程において大切な経験であり、関わりが深まる通過点であると捉える。

(2) 教材観

幼児はこれまで空き箱などの身近な素材や段ボールなどを利用した遊びを楽しんできた。段ボールを使っての遊びでは、一人ではうまくいかず、イメージしたことが実現できるよう「手伝ってほしい」と、自分の思いや考えを言葉で伝えたり、友達と相談したり、協力したりと幼児同士の関わりが見られた。また、これまでの検証保育の中でも、段ボールを使って人形のおうちづくりをしたり、好きな形に型どり、遊びの中で自然物と組み合わせて制作を楽しんだり、箱つみ遊びに活用したりして楽しむ姿が見られる。軽量で丈夫な教材であり、使い方によって遊びのおもしろさが広がる。そのため、友達と一緒に目的や目標をもって遊び、イメージを共有して工夫したり、試したり、繰り返して遊ぶことができる為、幼児の遊びへ取り入れる効果的な教材の一つだと考える。本時の好きな遊びの中でも、段ボールを遊びの中に取り入れていく。幼児の遊びは教材との関りを深めながら充実していくことから、教師は、教材研究を通して「教材」のもつ特質や特性をよく理解し、園児の遊び方や関わり方に即して予測を持ちながら、活動をどのように広げ深めていくのか、その教材の特性を生かしながらどのようなことが体験できるのかなど、教材の持つ教育的価値を理解することが重要である。幼児と教材との関わり方について理解を深め、必要な材料と一緒に考えたり準備したりすることで、遊びが展開し充実していくよう、必要に応じて構成したり活用できるようにしていく。

(3) 指導観

幼児が自分なりの思いや考えをもちながら友達と遊んでいる姿を見守る。教師のつぶやきから幼児の気づきとなるような言葉かけの援助をしたり、幼児の周りの環境（場、もの、人）を意図的に整え、幼児が自ら環境に関わり、遊びや活動を通して感じたり、気づいたり、考えたりできるようにする。教師の存在が人的環境の一つであることを意識し、共に遊びを楽しんだり、嬉しさや楽しさ、悔しやさ等の感情を共有したり、一人一人の良さを認めて周りに知らせたりすることで、子ども同士のつながりを育てていけるようにする。また、遊びの中で幼児との対話を楽しみながら、表現することの楽しさやアイデアを考える面白さを言葉や表情で伝え、幼児のイメージを引き出したり、思いや考えを言葉で伝えたりすることができるように援助していく。

幼児の遊んでいる姿から、発達を見通して、今必要な体験が何かを考え、その体験が可能となるよう援助していくことも重要である。幼児が周囲に働きかけて試行錯誤を繰り返したり、活動に没頭する中で思いを巡らしたり、心動かす体験をしていけるよう、遊びの様子を見て、遊びの時間を延長したり、場を見直したり、環境の再構成を行う等、思いきり遊びを楽しめるようにする。また、自分なりの目的や目標をもって遊びに取り組んでいる姿を認めていくことで、挑戦したり試したり工夫したりして、自信をもって遊びや活動を進め、様々な経験を積み重ねながら、達成感や自信へとつなげていけるよう、援助を行っていきたい。遊びの後の振り返りでは、写真を活用し、遊びや活動について対話することで、クラス全体で共有できるようにする。対話した際の幼児の声（つぶやき）をひろい、ドキュメンテーションを作成・掲示することで、自分たちの遊びを振り返り、新たな発見や気づきから遊びそのものの魅力を感じたり、自分や友達の良さに気づいたりしながら、遊びの更なる意欲や期待につなげていけるようにする。

5. 公開保育リフレクション

(1) 保育者の振り返り

- ・職員間の連携があることで、箱積み遊びにじっくり関わることができた。子どもたちがどんな活動を好み、どこで楽しんでいるのかを、日頃から職員間で振り返り、その日の保育について事前に相談(共通理解)したことで、協働体制がとれていた。
- ・箱を高く積むためにはどうしたらいいのか、崩れても、試したり工夫したりしながら遊びを繰り返し楽しむ姿が見られた。安全面に配慮しながら、幼児がやってみようとする姿を見守り、必要に応じて援助することで、できた！という達成感を味わっている姿が見られ、喜びを共有することができた。しかし、ホールでの活動であったため、戸外で遊んでいる子やクラス、制作コーナーで過ごしている子の様子を確認することができず、子ども同士の関りをつなげることができなかった。
- ・遊びの振り返りの際、教師の話し方や場の持ち方の工夫が必要である。楽しく参加し、話を聞きたくなるような工夫を行っていく必要がある。また、振り返りの場面では、幼児と共にドキュメンテーションをつくるということに気持ちが向いてしまい、子どもたちが楽しかった遊びや活動について伝え合うことができず、共有することができなかった。振り返りの場で、幼児と共にドキュメンテーションを作成することや、ドキュメンテーションの活用の仕方について考えていく必要がある。

(2) 指導助言(琉球大学教育学部 宮城利佳子)

【箱積み遊び】

- ・「ブロックを高く積む」という遊びが、段ボール箱を使って「箱をつむ」という遊びへ、どのようにして発展していくのかという遊びの過程(幼児が自分たちで考える、気づかせていくプロセス)を、幼児と一緒に大切にしていけることが重要である。
- ・ホールだと、遊びが単調になりやすい。戸外であれば風が吹いたり、地面が不安定だったり、積んでいくと倒れやすい要因がある。倒れないようにするには？どうしたら高く積むことができる？など、遊びの中で考えたり、気づいたりする場面が出てくるように遊びを展開することが大切である。
- ・幼児がこの遊びで何を楽しいと感じているのか、教師は何を経験してほしいと思っているのか、活動の見通しをもって、遊びが展開していくようその目的に合わせた教材の準備が必要。教師の言葉かけや援助の仕方によって遊びがより楽しくなる。
- ・教師の手立てとして、遊びに必要な材料を事前に用意しているのは良かったが、遊びの中で説明や言葉かけが多いように感じる。「自分たちでやっごらん！」と、子どもたちに活動を委ねて、子ども自身で、考えたり気づかせたりするような声かけを意識してかかわることが大切である。

【全体の遊び】

- ・涼しくなって、心地よさを感じることができる時期なので、テラスや戸外で制作などができるような環境をつくり、戸外で遊ぶ楽しさが感じられるように工夫していくとよい。
- ・教師も子どもも、やってみよう！とわくわくすることを保育の中に取り入れて共に楽しんでほしい。〇〇をやらなきゃいけない、ではなく〇〇やるの楽しみだね！と、遊びを保育を楽しんでほしい。

- ・生き物の紹介コーナーでは、子どもに興味・関心がわいてくるような環境構成を行っていくことが大切。生き物への愛着がわくように名前を付けてあげたり、教師が大切に関わることで、幼児も命あるものへの関わり方を知っていく。丁寧な環境があれば、子どもは自ら関わるができる。間接的指導(環境づくり)を丁寧に行うことを意識してほしい。

【 幼児との振り返り 】

- ・振り返りの場面では1つのテーマを皆で話すというよりも、教師が幼児に質問を投げかけていくようなやり取りが多かった。ドキュメンテーションをつくらんと意識が向いていたのだと思う。子どもたちがどんな遊びをしていたのか、どんな思いで活動していたのか、それを聞いていた人はどう思ったか等、子どもの声を聴き、子ども主体とした振り返りを行うことが大切である。
- ・教師も話を聴くといった姿勢で関わり、聞いていて気づいたことがあれば質問してみる等、幼児が自分の言葉で伝えたり相談したりできるよう、振り返りの持ち方を工夫していく必要がある。子どもの気づきや、つぶやきを拾い、楽しかったことを明日もやりたいね！やってみたいね！と次の保育につなげていくというところを意識して振り返りができるといい。

VI 研究の検証方法

1. 検証の位置づけ

本研究は、幼児が興味・関心を持って自ら環境に関わり、遊びを楽しむ中で、幼児の遊びが広がり、深まっていく（夢中になって遊ぶ）姿から検証する。公開保育当日の実践は、日常の取り組みを整理・共有する機会として位置づけ、前後の事例と併せて検討する。

2. 検証対象（期間・場面・範囲）

対象は、5歳児、21名の学級である。

検証対象期間は、公開保育前後の12月1日～12月16日とし、制作コーナーにおける素材との関わりを中心とした遊びの場面を主な分析対象とした。公開保育当日は、実践の整理・共有の機会として別に記録し、前後の事例と関連づけて検討した。

3. 収集したデータ

収集した資料は①幼児のつぶやきの記録、②ドキュメンテーション（掲示物・記録）、③エピソード記述、④写真・動画・作品等である。つぶやきは幼児の関心や困り感、願いを示す手がかりとして記録し、ドキュメンテーションは遊びの過程の可視化と職員間共有の記録として整理した。エピソード記述は、前後の変容を文脈の中で捉えるために用い、写真・動画・作品等は客観的な視点で見えていくための補助資料とした。

4. 検証の目的

検証保育を通して、幼児の遊びが広がり、深まっていく（夢中になって遊ぶ）姿から次の実践へのヒントを読み取る。幼児の心の動きや変容を捉え、次の手立てへと繋げていく。

5. 評価の視点について

検証保育の評価では、幼児が興味・関心を持った環境に自ら関わり、遊びを楽しんでいる姿に視点をあてていく。遊びを通してどのように環境に関わり、どのように友達と関わり合って遊びを進めているのか観察を行い、エピソード記述で記録をとる。記録を基に、幼児が教師や友達とかかわる様子、遊びの中で試行錯誤しながら遊びを進めていく姿を捉え、幼児の変容に焦点を当てて評価の視点とする。

Ⅶ 実践保育の検証

1. 保育実践で収集したデータから幼児の姿を捉える

研究テーマに基づいた保育実践を行い、保育の振り返りや、つぶやきの記録、ドキュメンテーション、エピソード記述、写真や動画を通して、幼児の姿や変容をもとに検証を行う。段ボール箱や身近な素材を使って遊びを楽しむ中で、友達と同じ目的をもって、自分の思いや考えを相手に伝えながら、共に試行錯誤する様子や友達や教師との関わり方を捉え、幼児の心の動きや育ちに視点をあてる。また、研究視点に基づく教師の援助の工夫を通して、検証の効果性や幼児の変容を捉えていく。

(1) 分析方法（線の凡例にもとづく一次分析）

本研究では事例の記述に対して、幼児の姿・教師の関わり・環境構成・省察を区別して読み取るため、以下の凡例（線種）を用いて事例を整理した。

波線「~~~~~」：幼児のやってみようという思い（興味・関心）やつぶやき。

一重下線「_____」：幼児のやってみようという思いを引き出す環境構成の工夫。

二重線「=====」：教師による援助の工夫。太線「—————」：探究心の芽生え。

破線「- - - - -」：友達の良さに気づき関りを深める姿、幼児の心の動きや変容。

点線「.....」：反省や課題。

(2) 分析の観点（二次分析：広がり/深まりへの統合）

一次分析（線種）で整理した事例を、研究の視点である「遊びの広がり」「遊びの深まり」の観点から統合して検討を行い、下線を保育の省察の手がかりとして用いた。

【広がり】関わる友達や役割、やり取りが増える/素材や道具の使い方・組み合わせが増える

【深まり】試行錯誤が継続し、工夫・改良が重なる/目的や見通しが共有され、遊びが継続・発展する。

2. 検証前の姿

検証前の幼児の様子	教師の願い
<p>すみれ組は、進級児9名、保育園より入園11名、初めての集団保育1名、計21名の年長クラスである。</p> <p>子どもたちは友達と誘い合って、戸外で体を動かして遊んだり、園庭にある草花の観察をしたり、蝶やバッタなどの虫捕りをしたり、制作遊びを楽しんだりなど、それぞれ遊びを楽しむ姿は見られるが、遊びが長続きせず途切れてしまう。幼児の実態として困ったことがあっても自分の思いや考えを伝え合うことがなく、「もういいよ」と遊びから抜けてしまったり引いてしまう姿が見られ、夢中になって遊びを楽しむ姿が少ない。また、初めて取り組む活動に対して不安になり、友達の様子を傍観していたり、「先生と一緒に遊びたい」と教師の後をついてきたり、自信のなさから、自分を発揮することができていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達との関わりの中で、刺激を受け合っていて主体的に遊びを進めていこうとする姿が見られず、日頃から意欲をもって遊びを楽しんでほしい。幼児同士が関わり合って遊びを楽しむことができる、魅力ある環境構成を行うことで、気の合う友達の枠を超えた友達同士のやりとりを通して、関係性を深めていってほしい。 ・同じ目的を持った遊びや活動を楽しむ中で、嬉しい、楽しいなどの感情体験を共有することで、友達の良さに気づき、共に遊びを進める楽しさを感じられるように援助していく。自己肯定感を高められるようにかかわることで、自己発揮へとつなげていきたい。

3. 検証保育

1 2月2日(火)【検証場面①】

キーホルダーを作りたい

【背景】

すみっこぐらしのキャラクターが大好きなE児が、友達の鞆についているキーホルダーを見て羨ましそうにしている様子が見られた。製作遊びが好きで自分でイメージしたものを作って楽しむが、それだけで遊びが終わってしまう。教師は、作ったものを遊びに取り入れて遊んだり、共に製作遊びを楽しんでいる友達との関わりも深めてほしいと感じていたため、「自分で作ってもいいんじゃない？」と提案した①。「先生、知ってる？同じじゃないのはレアっていうんだよ。やった！自分だけのキーホルダー作ってみたい！」とキーホルダーづくりを始めることになった②。近くにいたR児、I児も「一緒にやりたい」と乗り気である。クラスの制作コーナー近くにテーブルを用意し③、「どんな材料が必要なのかな」と教師が投げかける④と、すみっこぐらしのぬりえや、鞆につなげるリボン、ふわふわのキーホルダーにしたいからふわふわするものが必要と、それぞれ意見を出し合う。制作コーナーに足りない教材は、共に教材庫で材料を探し⑤、さっそくキーホルダーづくりが始まった。

【エピソード①】

E児は、好きなキャラクターの色をぬり、色画用紙に貼りつけると、「次はどうしたらいいかな⑥」とつぶやいて手が止まる。どうやって進めていけばいいのかと3人で相談する⑦ものの、「先生、困った」と教師へ助けを求めに来た。教材庫から持ってきた材料を見せ「作り方を一緒に考えてみよう」と、子どもたちのイメージを聞き出しながら話を整理していく⑧。すると、これまでの制作で紐通しをした経験のあるE児が「穴あけパンチで穴をあけてリボンを通したら、この中にふわふわ(綿)が入れられるかな？」とアイデアを出し、試し始めた⑨(図6)。少しずつイメージした形に近づいてきたようで「いいね、いいね。いい感じ。」嬉しそうな様子で制作を進めていく⑩。「ここに穴開けるの？E教えて」とR児、I児もE児に作り方を教えてもらいながら進めていく⑪。リボン結びで閉じてほしいと教師へ作品を持ってきたが、教師が触ると、穴あけパンチの隙間から少しずつ綿が出てきてしまう。「ふわふわが逃げちゃう」と慌てるE児に、「壊れた時は修理すればいいんだよ！」とI児が声をかけた⑫。「何で修理したらいいんだろう」と教師がつぶやく⑬と、「セロハンテープにしよう！」と顔を見合わせ、さっそくセロハンテープを貼ってみる。何度か試してみるが、リボンの素材には、くっつけることができないと感じたようで、隣に置いてあるホッチキスで試してみる⑭と、きれいに穴がふさがった。「Iすごい。それいいね！」とさっそく3人で交代ずつホッチキスを使い、完成させていく。「やった！できた！」と完成したのを見せ合って喜ぶ3人。近くに置いてあった段ボールに、E児が作った作品を入れると、R児、I児も入れた。「すみっことちのおうちみたいだね」というI児に、R児も「それじゃあ、キーホルダーじゃなくてお人形にしよう。お人形のおうちをつくらう！」「すみっこぐらしのこがたくさんいるから、すみっこランドっていうおうちにしよう！」と、段ボールを持ってきて人形のおうちを作り始めた(図7)。「2階



図6 人形を作るため
リボン通しをしているE児

建てにしよう、ここに階段つけよう」と3人で思い思いにアイデアを出す。「ベッドもあるといいな」「ここは遊ぶ部屋にしよう」と、翌日以降もイメージしたことを共有し、作ったり飾ったり、協働しておうちづくりを楽しんでいた④。



図7 人形を並べておうちづくりを楽しむ様子

【 エピソード② 】

翌日、「やってみよう」と思った幼児がすぐに遊びだせるように、人形作りのコーナーを作り、人形を作った際の流れが分かるように、ドキュメンテーションを作成して、クラスに掲示した②。E児が「昨日の写真だ！」と掲示してある写真に気付き、じっと見つめている④。そこへR児がきて「人形の作り方説明書だね」とつぶやく⑤。「説明書ってどんなもの？」と教師が聞く⑥。「〇〇してください。〇〇したらダメです。って大事なことが書かれているお手紙だよ」とR児が説明する。それを聞いていたE児は「お手紙ね！」と言うと、掲示していた用紙を取って写真の下に文字を書き始めた。書き終わると、さっき掲示していた場所に貼り直し「これでよし」と納得しているような姿が見られた(図8)⑤。「これで完成？」と教師がE児に声をかける⑥と、「昨日Aも作りたいって言ったから、説明書があったら分かるでしょ」と答え、自信たっぷりに自分の書いた説明書を見つめていて、遊びが充実して楽しかった思いを、自分の言葉で表現している⑥ののだと感じた。



図8

写真記録(ドキュメンテーション)を基にE児の作った説明書

【 考察 】

キーホルダーづくりという同じ目的を持った友達との関わりを楽しみながら、友達のアイデアを受け入れることで、キーホルダーを人形に見立て、一緒に人形のおうちづくりをしていくという遊びに広がった。一人では考えつかないことも数人で考えると発想の広がりや深まりが見られ、イメージを伝え合い、自分たちで作った人形を使っておうちごっこを楽しんでいた。また、昨日の遊びをドキュメンテーションで掲示するという教師の援助が、E児の伝えたい意欲と重なり、人形の作り方の手順を書いたり、キャラクターの塗り絵を貼りつけたりして、説明書づくり(ドキュメンテーションの作成)へと繋がり、遊びが深まっていった。

教師は、「キーホルダーをつくる」という共通の目的の実現のために、幼児同士で試行錯誤しながらも、一緒に実現に向かおうとする過程を丁寧に捉え、助けを求めに来た際も、答えを言うのではなく、問い返したり、整理したりしながら、他の材料に気づくように援助を重ねた。また、E児が友達と一緒に同じ目的をもって遊びを進めていく中で、自分とは違う感じ方、考え方、イメージに気付き、その情報を自分の中に取り入れたり、友達の良さに気づいたりして、一緒に遊ぶ楽しさを味わえるよう見守った。

幼児同士で生み出した遊びを継続していくことができるよう「どうしたらいいかな」と困った場面でも、幼児のイメージした世界を大切に、共に遊びを考え、遊びの中から芽生える幼児の気づきから、十分考えさせたり、試したり工夫したりする時間を保障して遊びが充実していくよう援助していく。また、幼児の伝えたい気持ちが生じるような、充実した

遊びが展開できるよう、幼児の興味・関心を読み取りながら環境を構成していく必要がある⁽¹⁾。幼児と共にドキュメンテーション作成を行うことで、幼児が遊びで感じたことや考えたことを遊びのプロセスから読み取り、次の遊びの手立てを考えていきたい⁽²⁾。

12月4日（木）【検証場面②】

箱積み競争をやってみよう

【背景】

前日の振り返りにて教師は、1学期にブロックを高く積んでいたK児とY児の姿から、段ボール箱を高く積んでいく「箱積み競争」をやってみないかと提案する。これまで段ボール箱を活用して、お化け屋敷や電車ごっこ、船や人形のおうちづくりなど、様々な遊びを楽しんできた。積極的にアイデアや自分の考えを伝えて遊びを進めていく子もいれば、友達遊びや思いに合わせて動いたり、やってみたいと思ってもなかなか行動に移すことができず、遊びを見て過ごす子の姿が見られた。教師の願いとして「箱積み競争」という同じ目的を持った遊びを活動に取り入れることで、幼児同士が関わり合い、自分の思いや考えを伝えたり、友達の考えを受け入れたり刺激を受けたりしながら、意欲的に活動に取り組んでほしいと、箱積み競争を計画した⁽³⁾。グループ対抗戦で、どのチームが高く積むことができるか勝負する。箱積み競争で使う箱を、教師がクラスで組み立てている⁽⁴⁾と「今日箱積み競争するんだよね？早くやりたいな」と教師の側でK児と一緒に段ボール箱を組み立て、「何個重ねることできるかな」と箱積み競争を楽しみにしていた⁽⁵⁾（図9）。



図9 箱積み競争の準備を手伝うK児

【エピソード】

箱積み競争を始めようとする、「やりたくない」とK児が教師のもとへ伝えに来た。登園時には活動を楽しみにしており、教師と共に段ボール箱を組み立てたり、ホールに運んだり、積極的に準備を手伝っていた。「どうしたの？」と教師が声をかける⁽⁶⁾と「だって負けるかもしれないから嫌なんだよね」と答えた。これまでであれば、思いに寄り添い活動の参加を決めてもらう場面もあったが、この日は、K児の様子を見守ることにした⁽⁷⁾。そこへ、同じグループのA児・S児が誘いに来て、渋るK児の手をS児が早く！といわんばかりに引いていく。K児がグループへ戻った所で「よーい、スタート」教師が笛で合図した。舞台の上に積んである段ボールを子どもたちが一斉に取りに行き始めました⁽⁸⁾（図10）。背丈では届かない高さになると、近くのイスを持ってきて積み始めるA児⁽⁹⁾。その姿を見て周りの子もイスを持ってきた。高さが出てきたところで、また届かなくなり、S児が投げて積んでみる⁽¹⁰⁾。上手に箱が積めた。「ピピ〜！」終了の合図、笛が鳴った。「どのグループが高く積めたかな？みんなで見てみよう」と、見比べてみた⁽¹¹⁾。



図10 箱積み競争を楽しむ様子

「1回戦、すいかグループの勝ち！」教師の声で笑顔になって喜び合うすいかグループ。「もうちょっとで勝てそうだったのにな」と悔しそうな表情でつぶやくK児⁽¹²⁾の姿があった。「もう1回やってみる？」と教師が声をかける⁽¹³⁾と「やりたい、やりたい！次は好きな友達とグループを作ってやりたい。その方がパワーが出るから」というK児の声⁽¹⁴⁾で、新たにグループを作り2回戦を始めることになった。「人数が多いチームもあれば、少ないチームもあるけど、このままゲームを始めても大丈夫かな？」⁽¹⁵⁾と教師が声をかけるが、子どもたちは気にしていない様子。そのまま2回戦を始めた。男女9名チームは、どんどん箱を運んで積み上げるものの、箱のバランスをとることができず崩れてしまう。1回戦で負けてしまったE児は「A、頑張れ！」と大きな箱を積もうとするA児へ何度も声援を送る。女児チームは人数は少ないものの、「さっき崩れちゃったから、大きい箱を

下にしよう」「今から乗せるから箱が倒れないように支えてて」等、高く積むためのアイデアを出し合い、協力しながら箱を積んでいく⑦。「ピピ～！」終了の笛の合図が鳴った。1回戦と同じように、皆で高さを比べていく⑧。K児のいる男女9名グループが一番高く積んでいた。「2回戦はこのチームの勝ち！」教師の合図でK児は隣にいたE児とジャンプして喜んだ。その場で振り返りを行い、この日は全員が話す機会を設けた⑨。「なんでこのチームが勝てたんだろうね」と教師がつぶやく⑩と「チャンピオンになれたのは、チームの人数が多かったから」「大きな箱をたくさん運んできたから」「倒れそうになった時、頑張れ一っつて応援したから⑪」「倒れそうになったらMが支えてくれたから⑫」「大きな箱は下に置いた方がいい」「みんなで力を合わせたから⑬」「箱が頭に落ちてきて痛かった」「負けて嫌だったけど、楽しかった」と勝った子も負けた子も活動を終えての思いを話した。活動前は、やりたくないと話していたK児も、「1回は負けちゃったけど、次は勝って嬉しかった。E児と一緒にやってよかった」と嬉しそうな表情であった⑭。

【考察】

箱が崩れても高く積もうと何度も挑戦したり、隣で支えたり、アイデアを出したり、周りのグループと見比べて、もっと高くしたいと気持ちが高まったりと、どの子もわくわくした表情で「箱積み競争」を楽しんでいた。教師や友達と同じ目的をもって遊びに向かう一体感から「もっとこうしたい」「もう一回やってみよう」と活動への意欲へととなり、2回戦では、さらに活動を楽しんでいた。振り返りの場面では、負けた悔しさから表情が曇っていた幼児も、自分の思いを聞いてもらい、悔しい気持ちを周りが共感してくれたことで、表情が和らいでいった。

教師は、チーム対抗戦にすることで友達と一緒に活動を楽しみ、そこから生まれる嬉しさや悔しさなどの感情、グループでやり遂げたという達成感や満足感も共有してほしいと考えていたため、活動直前に「やりたくない」とつぶやいたK児に対して、活動の参加について触れず見守った。負けてしまっても、もう1度やりたいというK児の思いを受け止め、意見を取り入れて2回戦を始めたことで、K児の活動に対する意欲が高まったと考える。また、活動後の振り返りでは、全員が発表する場を設け、活動を終えての幼児の思い（声）から一人一人の思いを受けとめ、次に繋げていくことができるよう援助した。

教師は園生活の中で、幼児が友達と関わり、一緒に遊ぶことが楽しい、またやりたい！と感じられるような遊びや活動を計画的に取り入れ、幼児同士の関わりを深めていけるように援助していくことが求められる。幼児の声（つぶやき）から思いや願いを読み取り、遊びを通して、個々の力を発揮して生かされる喜びや、友達と協同して1つのことを成し遂げる達成感を味わえるような遊びを取り入れていきたい⑮。また、今回の検証場面では、振り返りの持ち方について改めて考える機会となった。幼児同士が互いの良さに気づいたり、認め合ったりして、関わりをより深めていけるよう、振り返り等で思いを伝え合うことができる場面を意図的に作っていききたい⑯。

12月9日（火）【検証場面③】 ※公開保育時の活動

どこまでできるかチャレンジしたい

【背景】

クラス活動で箱積み競争をした際のドキュメンテーションを作成し、クラス前に掲示していた(図11)⑰。体調を崩して欠席していたK児が、ドキュメンテーションを見ながら「楽しそう、いつやったの？やりたかったな」と話してきた。

「いつでもできるよ！一緒にやってみよう？」と教師が声をかける⑱と「やりたい！」ということで一緒にホールへ来た⑲。先に登園していた子たちが段ボール箱を積んで楽しんでいる様子。「今はいい。皆が終わってからやりたいから、先生後

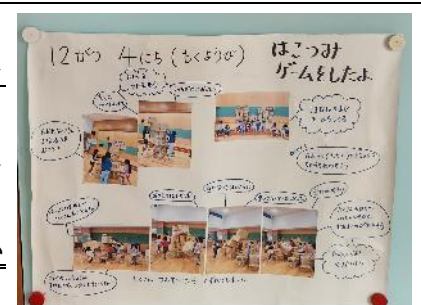


図11 箱積み競争をした際のドキュメンテーション

でね」と、戸外でサッカーをしている友達の方へ走っていった。それでも箱積み遊びはやりたいうので、園庭から時々、ホールの方を覗く姿が見られた。

【 エピソード 】

「先生、今ならできそう。一緒に箱積みやろう！」とK児が声をかけてきた^⑩。ホールを覗いてみると、さっきまで遊んでいた子たちがいなくなっている。「I児たちも一緒に遊ぼうって誘ってみる？」と、いつも遊びを共にしているI児のことを誘うか教師が問いかける^⑪と「先生と2人で遊びたいから、いい」と答えた。ゲームを始めようとする、M児が「Mも休んでて箱積みやってないから、やりないな」と話した。教師と2人で遊びたいと話していたK児が、どう答えるかな？と、教師は黙っていた^⑫。すると「いいよ。じゃ、MとKで勝負するから先生は審判してね」とM児も一緒に遊ぶことになった^⑬。笛の合図でゲーム開始。箱を積んで届かなくなってくると「イスも使っていいんだよね？」と教師に確認へきた。「Kさんがきめていいよ」と答える^⑭と、イスを持ってきてどんどん積んでいく。また届かなくなった。どうしようかなと周りを見渡し、ピアノ用のイスの方が、高いことに気付く。「これも使っていい？」と運んできて、箱を積んでいく。ちょうどそこでタイマーが鳴った。

教師：「この勝負、Kさんの勝ち！次は先生と勝負しようか？」^⑮

K児：「勝負じゃなくて、自分でどれくらい高く積めるかやってみたい！もっともっと高くしたいから」^⑯

教師：「どうすればもっと高く積むことができるのかな？」^⑰

K児：「もっと高いイスが必要。でも、幼稚園でもっと高いイスをみたことがない」

M児：「それじゃあ、この椅子に椅子を重ねたら？」

K児：「イスの上にイスを置くのもいい？」^⑱

教師：「先生が側にいる時なら大丈夫だよ」

K児とM児の思いを実現できるよう、手伝うことにした^⑲。教師がイスを支え、K児がイスの上に立って段ボールを積み上げていく。1段積んだところで重ねたイスからも、届かなくなった。「K、すごいね。先生よりも、ずっと高くなっちゃった」と教師が身振りを交えて大きさを表す^⑳と「すごいでしょ」と満足そうな笑顔を浮かべた^㉑。そして、「お迎えの時まで残しておきたい。触ったら崩れちゃうから『さわったらダメです』って書きたい」と話し一緒に画用紙に書いて貼りつけた^㉒。

【 考察 】

K児は「先生と一緒に遊びたい」という思いを教師に受け止めてもらえたことで、自分もM児を受け入れ、箱積み競争を楽しんでいた。遊びを楽しむ中で、「自分でどれくらい高く積めるかやってみたい」と新たにやってみたいことをみつけて挑戦し、崩れても繰り返し遊びを楽しみ、どうしたら高く積むことができるか、試したり考えたり、友達のアイディアを受け入れたりとしながら遊びが深まっていく中で、自分でやり遂げた達成感を味わっていた^㉓。

教師は、幼児の思いを読み取ろうとする気持ちを持ち、その時の幼児の姿に合わせて見守ったり、共に遊んだりして幼児の気持ちを支えた。また、幼児が実現したいという思いを共有し、アイディアを取り入れ、安全面をサポートすることで、幼児の「やってみたい」気持ちを実現することができるよう援助した。

教師は、幼児のよき理解者として幼児の思いや声を聴き、幼児が安心感を持つことで、自己を発揮して遊びを楽しむことができるように支え、幼児が「やってみたい」と意欲的に遊ぶ姿へとつなげていきたい。そして、遊びの中で自分のしたいことを繰り返し楽しみながら、友達の刺激を受けて、さらに「やってみたい」という思いが芽生える経験を積み重ねて、幼児が夢中になって遊ぶ姿へとつなげていく⑤。

12月11日（木）【検証場面④】

戸外で箱積み遊び～ 基地づくり

【背景】

K児がホールで箱積み遊びをしていた際に通りかかったG児が、「Kすごいね。一人でやってるの？」とK児に声をかけた④。「Gもやりたいんだけど」と教師に訴えに来たが、片付けの時間が近づいており、また後日、一緒に遊ぼうと約束をしていた④。

【エピソード①】

教師が戸外で鉄棒の補助をしていると、G児とY児に「先生、一緒に箱積み勝負しよう！」と誘われた④。教師が鉄棒の補助をしている状況を見て「それじゃあ持ってくるよ」④と、教師のいる戸外で箱積み競争ができるよう、ホールに置いてある段ボール箱を、園庭へ運ぶことにしたようだ。2人は、ホールからテラスへと全ての箱を運びだし、「どこでやるか？」と相談を始めた。「Mもやりたい！」と遊びに加わり、2名ずつに分かれ、タイマーをセットして箱積み競争が始まった④。どちらも背丈を超えるとぐらつきはじめた。「崩れちゃうからここにしよう」倒れないようにと考えたG児とY児は、ブランコの囲い部分を支えにして、ブランコの側で積みなおし始める（図12）。届かなくなってくると



図 12

園庭で箱積み競争を楽しんでいる様子

「こうするんだよ！」とY児が段ボールを投げて見せた。上手に箱を積み上げることができる時もあれば、ぶつかった衝撃で積んだものが倒れそうにもなるが、2人は何度も箱を投げ、倒れるかもしれない、というドキ感を楽しんでいる④。タイマーの合図でゲーム終了。どちらが高く積めたか見てみようとして箱の側から離れたとたん、Y児とG児の積んだ箱が崩れた。「誰も触っていないのに何で崩れちゃったんだろう」とびっくりするG児に、「だって、さっきからグラグラしていたからね」とY児が答えた。「いっぱい箱を運んだから手がちょっと痛いけど、楽しかったね」と満足げなG児は、「次はサッカーしてこよう」と、次の遊びへと笑顔で走っていった④。

【エピソード②】

近くで様子を見ていた数名の男児が「自分たちもやってみたい」と駆け寄ってきた④。みんなで大きいの作ろう」とI児がアイデアを出し、「いいね、やってみよう」とすぐに箱を積み始めた④。「見て、トンネルみたいな穴がある」そういうとN児がくぐっていった。出てきたところは小さく囲われている。「ねえねえ、みんなこっちを通って入ってきて。なんか秘密基地みたいだよ」N児の言葉に皆わくわくした様子でトンネルをくぐって進んだ。「本当だ。俺たちの基地にしよう」とさらに箱を積んでいく。「ここも壁にしよう。倒れないようにここに箱を置こう」「でも、これはここがいいよ」とイメージや思いを伝え合いながら基地づくりを楽しんでいた④（図13）。片付けの時間になり、「基地どう

「しようか?」と教師が問いかける^⑭と、さっき風で倒れたから、そのままにしていると崩れるかもしれない」「天気予報を見てきたら、今日はお昼から雨だって」と子ども同士で相談を始めた^⑮。

「片付けた方がいい」と決まると、明日もすぐに続きをやりたいからと、テラスへ運びだした。

「明日は色もぬろう」「部屋はもう少し大きい方がいいよ」と段ボール箱を運びながら、明日の遊び(続き)を楽しみにしていた^⑯。



図 13 園庭にて段ボール箱で基地づくりをしている様子

【 考察 】

教師も交えて一緒に遊びたいと考えていた Y 児と G 児は、大小合わせて 50 個ほどある段ボール箱を運ぶことも「遊び」に変えて楽しんでいた。園庭での箱積み競争は、風が吹いたり地面が不安定だったり、高く積むことが難しくなったことから、どうしたら高く積むことができるか考え、ブランコの柵を支えにしようしたり、箱が倒れてこないように支えとなる箱を置いてみたりと試行錯誤しながら楽しんでた。箱を高く積んでいく過程で、倒れるかもしれないというドキドキ感から、自分たちの新たな楽しみ方を見つけて、遊びが広がっていく様子も見られた。また、他の遊びをしていた子も、友達が遊んでいる様子を見て「やってみたい」と一緒に遊びを楽しむ姿が見られ、園庭の広さ、開放感から秘密基地を作るという新たな遊びも生まれていった。

幼児が戸外での遊びを楽しむことができるよう、教師自身が遊びを楽しみ、幼児と共に楽しいね!次はこんなことをしてみよう!と気持ちがわくわくするような言葉かけの援助を心がけていきたい。同じ遊びでも、遊ぶ場が変わることで他者の刺激となり、遊びが生まれ、さらに広がっていくことから、柔軟な考え方をもち、幼児の姿に合わせた環境構成をしていくことが必要である^⑰。また、幼児が友達と一緒に活動する中で、共通の目的を見出し、それが実現する喜びや協同する経験を重ねることができるよう環境を構成して、幼児同士の繋がりや関わりを深めていく^⑱。

12月15日(月)、16日(火)【検証場面⑤】

クリスマスツリーを作ろう

【 背景 】

テラスに置いてあった段ボールを見て「絵が描いてある、この箱かわいいね。絵を描いたり、色を塗ったりして、もっとかわいくしてみたい^⑲」と A 児と I 児が話していた。2 人の姿から、教師は絵の具や筆、はけ等を準備しておいた^⑳。テラスに用意してある教材に気づくと、さっそく「やってみたい」と段ボール箱への色塗りが始まった^㉑。楽しそうな様子に、近くで見ていた子たちも遊びに加わり、思い思いに箱に色を塗る^㉒(図 14)。掌に絵の具をたっぷりつけ、手形をつけて楽しむ子もいる。「明日もやろうね^㉓」と絵の具遊びが数日続いた。



図 14 テラスで段ボール箱に色付けを楽しんでいる様子

【 エピソード 】

「先生、見て！緑の箱がいっぱいになってる」絵の具遊びで色付けした段ボール箱を乾かしているのを見てA児が気付いた。その日の振り返りで、子どもたちと一緒にクラスへ運んで積み重ねてみた。「同じ色の箱を重ねてみたら何に見えるかな？」



図 15 段ボール箱を積み重ねて紹介する様子

という教師の問いかけに、「クリスマスツリーみたい！」とK児が答えた(図 15)。「1つだけだと分からないけど、重ねるとクリスマスツリーみたい」「クリスマスツリーなら飾りつけもしたほうがいいよね!」子どもたちからの提案でクラスの前に箱を移動させ、飾りつけを始めることになった。子どもたちと一緒に教材庫から飾りつけに使いそうなものを探して持ってくる。「この上において! そうそう、そんなかんじ」とクリスマスツリーをイメージしながら声をかけ合い、段ボール箱を積んでいく。「キラキラはここがいいかな?」と友達と飾り付ける場所を相談する姿も見られた。飾りが足りないからと、折り紙で作って飾りつけたり、雪に見立てて綿を広げてみたりと、クリスマスが近づいているということもあり、期待感でわくわくしながら会話や飾りつけを楽しんでいた(図 16)。

【 考察 】

普段の絵の具遊びでは使わない、はけを出しておいたことで、絵の具遊びがさらに楽しくなり、ダイナミックに箱へ色付けしたり、手形をつけたり、イメージした絵を描いたり、伸び伸びと遊びを楽しんでいた。また、楽しかった思いから翌日も絵の具遊びが続き、A児のつぶやきから得たヒントをきっかけに、絵の具遊び〜ツリーづくりへと、遊びが展開していった。



図 16 段ボールで作ったクリスマスツリー

幼児が今何におもしろさを感じているのか、幼児のやってみみたい気持ちが引き出せるような言葉かけの援助を行い、興味・関心に合わせた環境を精選していく必要がある。幼児が「やってみみたい」と遊びを楽しみ、継続・展開しけるよう、教師自身が子ども目線の遊び心を持ち続け、1つの遊びに対して多様な視点をもって、援助していく。

12月5日(金)【検証場面⑥】

共通理解から生まれた制作コーナー

【 背景 】

日々の保育終了後、職員間で保育の振り返りを行う時間を設けている。これまでの振り返りの中で、幼児の姿から思いを読み取り、環境をどのように構成していくか等、教師間の共通理解を図り、保育を進めていくことが必要だと感じていた。検証保育を進めるにあたり、振り返りの内容(幼児が興味を示していること、遊び、環境構成、援助の方法)を園マップに記録して掲示することで、全職員の共通理解が図られるように工夫した(図17)。

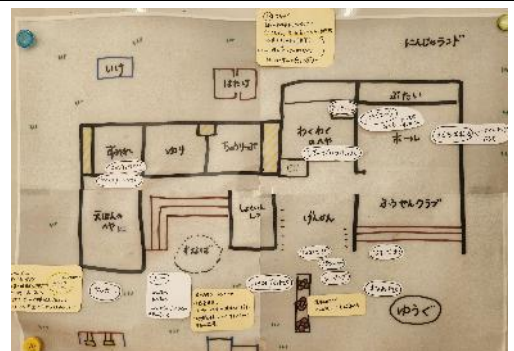


図 17 日々の振り返りを園マップに記録し、職員室に掲示

振り返りの中で、各クラスにて自然物を遊びに取り入れ、段ボールや空き箱など身近な素材と組み合わせて制作を楽しむ姿があり、友達の作品を見て、自分もやってみたく感じている②子が増えてきている様子があることが分かり、全職員で、わくわくの部屋を「秋の制作コーナー」として環境構成を行った⑧

【 エピソード 】

わくわくの部屋に展示してある友達の作品を見て「かわいいね。やってみよう！」とK児とA児が制作を始める⑨。必要な材料を見つけては、自分のイメージしたものをつくっていく。近くで制作の様子を見ていた教師に「ドングリの公園作っているんだよ。これが滑り台で、ここはブランコで...」と作ったものを説明し始めた。教師が「Kさんって制作が得意なんだね!」と声をかけると、一緒に制作をしていたA児からも「Kは製作が上手なんだよね」と褒められ、嬉しそうにしている。年中組のR児は、興味津々な様子で「何作っているの? R児もやりたい」とわくわくの部屋に入ってきた⑩が、どの材料を準備して制作を進めていこうか戸惑っている様子が見られた。K児は、作りたいイメージがわいてくるよう、展示してあるものづくりの本から「何が作りたい? これはどう?」と問いかけたり、いろいろな自然物を見せたりして、制作に必要な素材をR児と一緒に準備する⑪。R児は嬉しそうに制作を始めるが、どんぐりを段ボールにくっつけることができず教師に助けを求めにきた。教師は「こういうときはどうしたらいいんだろうね」とつぶやいた⑫。K児が「ちよつと見せてみて! ボンドの量が足りないんじゃない? ここにもっとボンドをつけてみて」とR児の作りたいイメージを聞き取りながら手伝い、共に制作を仕上げていく⑬。もう少しで完成という所で、素材がなくなってしまった。子どもたちが作りたいとイメージしたものに合う、必要な素材を教師も共に考え、環境を再構成することにした⑭。「もっと可愛くしたいから、キラキラモールが欲しいな。飾りつけのポンポンも必要だし、ここにはふわふわのやつ(ちがや)が使いたい」⑮と話す。子どもたちの声を聴き、必要なものを幼児と共に教材庫やクラス、園庭に探しに行き、環境を整え、⑯制作を再開した。R児は「できた! ママにプレゼントするんだ!」と嬉しそうにしている。自分の制作は途中であったが、R児の嬉しそうな姿を見て満足気な表情を浮かべ「続きは明日やろう」と明日の遊びを楽しみにしているK児であった⑰。

【 考察 】

職員間の振り返りの中で、遊びを見直し「秋の制作コーナー」として環境構成を行ったことで、「やってみたく」と感じた子が、クラスの枠にとらわれることなく遊びを楽しめる場となり、年長児・年中児が共に制作を楽しんでいた。困っているR児の姿を見て手伝う場面では、K児が自分の力を発揮しながら関わろうとする姿があり、同じ場で過ごすことで、遊びを通して気持ちを通い合う姿も見られた。教師

は「秋の制作コーナー」として、身近な季節の変化「秋」を感じられるような素材を取り入れることで、幼児が自然物に興味・関心をもち、より遊びが充実するだろうと、幼児と一緒に園庭や散歩で見つけた自然物を遊びに取り入れられるように準備しておいた。また、幼児の興味・関心が引き出せるよう、幼児の作った作品や自然物を展示することで「やってみたく」と意欲に繋がるように環境を整えた。職員間で協働的に振り返りを行うことで、保育を見直し、日々の幼児の姿や遊びを幅広い視点で省察できるようになると感じた。幼児の遊びを多面的な視点で見えていくことで、子どもの姿の持つ新たな意味が発見されたり、

次の保育の構想が広がっていくだろう。子どもがわくわくして環境と関わり、物や人との関わりを豊かにしていくことができるよう、職員間での振り返りを通して共通理解を図り、次の保育へ必要な手立てを考え、生かしていく⁹⁾。

4. 検証のまとめ

本研究では、幼児が夢中になって遊ぶ姿を引き出すために、環境構成の工夫を図り、幼児のつぶやきを手がかりに援助の工夫を行うことで「やってみたい」という思いが、遊びの広がりや深まりにどのような変化をもたらすのかという視点で研究を進めてきた。

幼児のつぶやき（声）を手がかりに、思いや願いを読み取り、人形作りに必要な素材、絵の具遊びができるような道具、自然物を遊びに取り入れることができるよう、環境構成の工夫を図った（①⑱⑳）。また、遊びを楽しむ中で、幼児のつぶやきに対して気づきとなるような問いをもたせる言葉かけをしたり（②④⑤⑥⑩⑫⑰⑱⑲）、十分に考える時間や試したり工夫したりする過程を保障することで、「こうしたらどうなるかな」という探究心が芽生え、「やってみたい」という思いを引き出し、意欲的に遊びを楽しんでいく姿が見られた（①②③④⑤⑥）。援助の工夫として、幼児の言葉、行動、動き、表情などから思いを表そうとしている姿を感じ取り、幼児のやりたい遊びを教師が共有し、一人一人とのやり取りを大切にすることで、安心感の中で自己発揮して、遊ぶことへとつながった（③⑫⑰⑳㉑）。また、好きな遊びを通して、友達との関りを深めていく過程で、自分とは違う思いや考えがあることに気づいたり、受け入れたりすることで、互いの良さに気づき、認め合う姿も見られた（①②③④⑦⑩⑰⑱⑲）。それは幼児が興味・関心を持って環境に関わる中で、「人・もの・こと」を通して、嬉しい、楽しいなどの感情体験を教師や友達と共有することができたからではないかと考える。幼児の遊びが広がり、深まっていくには、幼児が自分で気づいたり考えたりできるように、必要に応じて言葉かけを行うことが大切である。幼児が自分の思いを言葉で伝える力を育み、遊びや関わりを深めていけるよう、普段から言葉を引き出すような言葉かけの援助や、思いや考えを伝え合える場を意図的に作っていくことが求められる。

課題として、保育を進めていく中で、教師の思いと幼児の実際の姿にズレを感じた。教師の「こうだろう」という思いが先行してしまわないよう、幼児の興味・関心に目を向け、声を聴き、幼児の姿から共に遊びを考え、支えていくことが必要だろう。そのため、場に応じた振り返りの持ち方やドキュメンテーションの作成・活用の仕方を工夫し、幼児の思いを読み取る手だとしていきたい。幼児が様々な遊びを楽しむ中で、遊びの広がり、深まりが生まれ、心動かされる体験を重ねていくことができるよう、日々の幼児理解から環境構成や援助の工夫に努めていく。

Ⅷ 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

(1) つぶやきを手がかりにした環境再構成の有効性

幼児のつぶやきや声を受けとめ、遊びや活動に取り入れて環境の見直し、再構成をしていくことで、幼児が「やってみたい」と意欲的に遊びや活動を進め「明日もやりたい」と翌日の遊びや活動へとつながった。

(2) ドキュメンテーションを子どもと共に作ることによる幼児理解の深化

幼児と共にドキュメンテーションを作成していくことで、教師の見方とは違った、その時の幼児の思いや考えを知ることができ、幼児理解へと繋がった。幼児が今何に楽しさを感じ、興味・関心を示しているのを捉えることができ、次の保育に必要な手立てや関わり方が見えてきた。また、幼児はドキュメンテーションの掲示から刺激を受けて興味を持った遊びに取り組んだり、自分の遊びを振り返り「次はこうしてみようかな」と気づいたことから、さらに遊びを楽しんでいた。

(3) 職員間の振り返りによる多面的理解と援助の質の向上

保育終了後の職員間の振り返りを通して、それぞれの保育観を聴いたり、幼児の発達や、興味・関心を共有していくことで、多面的な視点で幼児の姿を捉えることができた。自分だけでは気づけなかった幼児の一面から、新たな気づきや発見があり、幼児理解につながった。また、振り返りの中で、遊びの展開の予測や、環境の再構成などについて共に考えたり、共通理解したりすることで、園全体で幼児一人一人に合わせた援助を行うことができた。

2. 課題と対応策

(1) ドキュメンテーションの作成・活用の仕方

ドキュメンテーションを活用できるよう、振り返りの場で写真を用いて、幼児と共にドキュメンテーションの作成を行ったが、教師は紙面を書くことよりも、幼児が全身で表すその時の思い（表情やしぐさ）を受け止め、共感したり、他児へ繋げたりすることが大切だと感じた。

幼児の思いや考えをメモや動画などで記録し、教師が作った土台（遊びや活動の写真を掲示したもの）に、幼児自身が思いや考えを言葉や絵にして書き入れて作っていく等、作成の仕方を検討していきたい。また、ドキュメンテーションを活用して、保護者に子どもの成長や学びを伝えることができるよう、掲示の工夫や発信・配布をするなどの工夫が必要である。

(2) 感情体験の共有を支える援助と言葉かけ

幼児が様々な遊びを楽しむ中で生まれた、嬉しい、楽しい、面白い、悔しいなどの感情体験を共有することができるよう、幼児同士を繋げていくことができるような言葉かけが大切だと感じた。

感情体験から、他者への伝えたい気持ちや幼児同士の繋がりが深まっていくため、幼児同士を繋げていく言葉かけをや環境構成を行い、幼児が心を動かされる感情体験が「共有」できるように援助していく。

(3) 自然に触れ、直接体験できる園庭環境

検証保育を通して、幼児が夢中になって遊びこめる環境をつくっていくためには、自然に触れ、直接的な体験ができるよう園庭環境の見直しが必要だと感じた。

幼児の姿や動線に合わせて園庭の自然環境を見直し、次年度に向けた植栽の年間計画を作るなどして環境を整え、幼児が自然に触れ合い、遊びに取り入れることができる環境構成の充実に努めていく。

(4) 素材（段ボールなど）の教材的価値の検討と教師の教材理解の深化

幼児の遊びの広がりや深まりが生まれていくよう制作環境の見直しを行ってきたが、教師自身が身近な素材とは何か、段ボールを遊びに取り入れる中でどのような教材的価値があるかを検討する必要があるがあった。

素材の教育的価値を検討し、幼児の遊びに見通しをもって援助していくことができるよう、教材に対する理解を深め、遊びに取り入れていくことが大切である。

<主な参考・引用文献>

- [1] 岡本功 2024 『指導計画の基本的な考え方と年齢別年の計画』(8頁)
- [2] 文部科学省 2018『幼稚園教育要領解説』(34頁)
- [3] 前掲 [2]
- [4] 岩立京子 編者 2014『事例で学ぶ保育内容 領域 人間関係』(175頁)
- [5] 前掲 [2] (20頁)
- [6] 福元真由美 編者 2013『事例で学ぶ保育内容 環境』(48頁)
- [7] 前掲 [2] (249頁)
- [8] 宮里暁美 監修 2023『子どもの「やりたい！」が発揮される保育環境』(9頁)
- [9] 前掲 [8]
- [10] 菊池翔豊 2025『2050年の保育 子どもの主体性を育てる実践的アプローチ』(159頁)
- [11] 大豆生田啓友 2025『子ども主体の保育をつくる 56の言葉』(19頁)
- [12] 中坪史典 編集 2019『幼児理解から始まる保育・幼児教育方法 [第2版]』
- [13] 前掲 [2]
- [14] 浅井拓久也 2021『活動の見える化で保育力アップ！ドキュメンテーションの作り方&活用術』